「七夕馬」の技術伝承

著者	服部 比呂美
雑誌名	無形文化遺産研究報告
号	1
ページ	196-179
発行年	2007-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1440/00003117/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

「七夕馬」の技術伝承

服部比呂実

一　七夕行事の諸相と七夕馬

七夕は、中国の牽牛織女の伝説と、機織りなど技芸の上達を願う乞巧奠の習俗が日本に伝わり、それが日本の棚機女の信仰や畑作物の収穫祭と結びついた祭りであると考えられている。現在、七夕祭りで顕著に見られるのは、学校などで子どもたちが短冊に「天の川」、「織姫」、「彦星」と書いたり、自分の願い事を書いたりして竹に結びつける光景である。こうした短冊竹の習俗は、近世の出版物にも見ることができる。天保九年（一八三八）の『東都歳時記』には、江戸の町で七夕の竹飾りが立ち並ぶ様子が描かれ、高い竹には短冊のほかにも吹き流しなどが吊されている。また錦絵の類では、たとえば天保十年（一八三九）頃の『雅遊五節句之内七夕』（歌川邦芳画）には、寺子屋に通う年ごろの子ども三人が、習った歌や願い事を書いた短冊、西瓜を模した紙やほおずきなどを楽しげに笹に吊す様子が描かれている。ただし、こうした様子は明治末年には衰退していったようで、若月紫蘭は『東京年中行事』の中で、歌舞伎座前の横町で七夕の竹飾りを見て「七夕の星祭は殆ど廃れて了つたとは云ふものゝ、まだ其趣味を忘れ得ずして、偶には之をやつて居るものがあるいつてもいゝ。」と記している。[1]

しかし、各地でおこなわれている七夕祭りの内容は、これとは別の様相を見せている。長野県松本市では、男女二体の七夕人形を作り、家の軒下などに下げる。神奈川県中郡大磯町西小磯では、子どもたちが短冊をつけた竹飾りで地面を叩き、竹飾りで作ったタケミコシを担いで地域内をまわり、最後にはこれらを海に流す。

この他にあげられる七夕の習俗が、七夕馬である。たとえば近世の資料では、世田谷区大場家の文化六年（一八〇九）『家例年中行事』七月六日の条には次のように七夕馬が記される。[2]

一、手習子有之者、机、硯洗清メ致。
　色紙、短冊拵、七夕江詩歌書、備ル。
　但、短冊竹者、新生竹伐用ル。
　蔵之脇江短冊竹立ル。
一、新敷ちがやニ而牛馬壱疋ヅヽ、拵。
一、同断ちがやニ而縄をない、短冊竹より小竹へ縄張。
　但、小竹弐本左右へ立、結付置、此竹へ縄を張、真中へ牛馬共ニ而下ゲ釣つなぐ。

大場家では、七夕の前日に新しいチガヤで馬と牛を一匹ずつ作り、竹と竹の間にチガヤでなった縄を張り、その二匹を縄の真ん中に下げている。

『日本民俗地図』[3]によれば、七夕馬の習俗は、福島、茨城、千葉、群馬、埼玉、東京、静岡、新潟、岡山、広島などに分布している。全国的には限られているが、東北地方南部から中国地方まで広範囲に見られる。しかし、

七夕馬という同一の呼称をもちながらも、その形態や祭り方などは地域ごとに異なっている。『家例年中行事』のように、馬と牛を一緒に作るところもあれば、二匹の馬を作るところもある。また、この馬を祖先の霊を迎える乗り物とするところもあれば、「タナバタサマ」を迎えるためというところもあり、七夕が終わると馬を屋根にあげるところもあれば、川に流すところもある。

七夕馬に関する研究として、田中宣一は七夕祭りのこうした多様な性格をとらえ、(一)牽牛・織女二星の相会を祝うもの、(二)技芸の上達を祈るもの、(三)農耕儀礼的側面、(四)子供などによる小屋行事、(五)水による穢れの祓除の内容を持つとし、(三)農耕儀礼的側面に七夕馬を位置付けている。[4]

倉石忠彦は、七夕の日の畑に入ると災難が及ぶという七夕の禁忌伝承を持つ地域は、去来するモノの乗る馬の伝承と、畑の初物を供える所の接点に位置することを確認し、こうした禁忌伝承の広がる地域には、畑作の収穫儀礼と去来神の信仰儀礼がかかわっていることを指摘した。[5]

高谷重夫は、七夕馬の民俗の実態を検討している。馬を飾る場所、供え物、それに付随する草刈の習俗、「ムカエウマ」「タナバタウマの乗り物」などと呼称されていることから、本来精霊祭り用のものであった馬が、後に七夕馬や田の神祭りの乗りものとして理解されたと解釈している。[6]

千葉県立房総のむらでは、平成九年から平成十二年の間に七夕馬を中心とした企画展示を四回開催した。この内容を『千葉県の七夕馬　草で作ったウマとウシ　七夕行事を中心に』[7]Ⅰ・Ⅱ、『千葉県の七夕馬　草で作ったウマとウシ』[8]Ⅲ・Ⅳの二冊の図録にまとめ、千葉県内の七夕馬に関する総合的な考察を行っている。

こうした研究の中では、七夕と盆の関係、七夕に迎えるモノは何かといった点を中心に論が進められているが、七夕馬作りの技術伝承を広範囲に比較検討したものはなかった。本稿では、福島県いわき市、千葉県茂原市、宮城県仙台市、多賀城市の現地調査からその伝承実態を明らかにし、七夕馬の製作をとおして民俗技術のあり方について若干の検討を行っておきたい。

二　七夕馬の伝承と実態

①　福島県いわき市の七夕馬

いわき市の七夕馬の習俗に関しては、大須賀筠軒（天保十二年―大正元年・一八四一―一九一二）による明治二十五年（一八九二）、『磐城誌料』に次のような記述がある。[9]

六日　七夕ノ歌ヲ書キ、竹梢ニ着ケ、立ル。農家ニハ小麦藁ニテ馬の形ヲ作リ、厩ヤノ上ハアゲ、又ハ門口ニ建て置クモアリ。是ハ盂蘭盆ノ精霊、是日ニ冥途を首途シタマフ迎馬ナリトイフ。妄誕甚シキ事ナレドモ、古ノ茅巻馬ノ遺風ナラン。按ニ、俊頼朝臣、散木集、連歌ノウチニ、「ちまき馬くびからきはぞにたりけり　きうりの牛はひきちからなし」と見ユ。俊頼ハ鳥羽天皇ノ御宇ノ人ナレバ、今ヨリ七百八十年以前ヨリ是等ノ事アリシナリ。

七日　早起、合歓木ノ葉ト豆ノ葉ヲ川へ流シ、「ねむたは流れろまめのはとまれ」トイフ。此俗ハ津軽辺にも行ハル、事ナリ。又、行燈、燈蓋類ノ油附タル物ヲ洗フ。

ここでは、旧暦の七月六日に農家で小麦藁を使って馬を作り、馬屋の上にあげたり、馬を門口に立てておいたりしたという。また、この馬は盂蘭盆に精霊を迎える馬と理解されていたのがわかる。また「ちまき馬……」の連歌については、『骨董集』（文化十年）や『嬉遊笑覧』（文政十三年）に同様の記述があるため、大須賀はこうした資料から解説を引用したもの

と思われる。ちまき馬に関しては、西行の『聞書集』の一七二番に「いたきかな菖蒲かぶりの茅巻馬はうなゐわらはのしわざと覚えて」という歌があり[10]、茅巻馬は端午の節供に子どもに与えられたもののようである。この歌は、「たはぶれ歌」十三首の一首であるが、他の十二首にも「麦笛、炒粉かけ、あこめの袖の玉襷、竹馬、隠れ遊び、雀弓、ひたひ烏帽子、土遊び」などの玩具があげられ、茅巻馬はこうしたものと同様に玩具として扱われている。

近年のいわき市内の七夕馬に関しては、『日本の年中行事　磐城篇』（岩崎敏夫著　昭和二十八年　海外協会図書館刊）、『写真で綴るいわきの伝統』（草野日出雄著　昭和四十八年　株式会社はましん企画事業部刊）、『いわきの話題事典　大地の驚異』（岩崎敏夫著　昭和五十三年　はましん企画株式会社刊）、『いわきの民俗』（下）（和田文夫著　昭和六十一年　いわき民報社刊）などに紹介されている。

【事例一】（以下、写真頁参照）

いわき市内の七夕馬に関して、好間町大利小川崎の片寄久四郎氏（昭和五年生まれ）によれば、このあたりの農家では、米、小麦、大豆、小豆を作っていたが、七夕馬は、収穫した麦藁、小麦の殻で作る。麦はうどんやすいとん、天ぷらの粉、パンなどに加工される。小麦畑は片寄氏の家の周りにあり、十月下旬から十一月十日くらいの間を秋土用（アジドヨウ）といって、この時期に麦を蒔くことになっている。

小麦の収穫は、六月下旬から七月上旬で、刈り取った後、小麦を干して脱穀し、麦を落とした後の麦藁が馬の材料となる。収穫後、十五日から二十日後が七夕にあたるようになっている。刈り取った麦藁は、三日くらい干してから使う。六月十日から一カ月は入梅の時期で、この期間に干すことは難しい。気候が良く暑くなったところを見極めてハセにかけて干す。片寄氏は、現在も小麦を作っているため、馬を作ることができるのだといい、今までも材料を変えたことはない。

今ではこの集落で片寄氏以外に馬を作る人はいないが、昔はどこの家でも家の主人が馬を作っていた。女性は作るものではなく、男性が作るものとされていた。馬は売り物にはせず、あくまでも各家で用意するものだった。お正月飾りも各家で主人が作ったものだが、片寄氏は子どもの時に「幸せは自分で作るものだ」と言いきかされ、一家の主人は家族全員の健康を祈って年中行事の飾り物を作るものであることを学んだという。

七夕馬は祖先の霊を迎えるために七夕に夕方二匹作るのが決まりで、綱をつけた馬は門口の地面に置き、家に頭が向くように、二匹を離して並べる。夕飯の前、六時から七時ころには、馬のどちらかの前で松明（松の根）を燃やす。七夕には「オボンサマ」が来ると言われていて、いわきでは「じゃんがらをやらない人はいない」と言われるほど盛んなじゃんがら念仏にも「早く来い来い　七月七日　七日過ぎれば　お盆様」という歌詞がある。実際には、お盆の始まりは新盆の家は七日、そうでない家は十三日からであると認識されている。お盆に牛を作ることはなかったが、片寄氏はその理由として当地が馬の産地だったからではないかという。

馬は四、五日そこに置いた後、馬屋の屋根の上にあげることになっている。一週間か十日で雨や風に当たって屋根から落ちてしまうため、その後は堆肥の中に混ぜてしまう。

片寄氏に馬の作り方を教えてくれたのは、父親ではなく、明治二年生まれの祖父であった。戦争中は、中学二年生を卒業した者から二十歳までの男子は、全員青年学校に入らなければならなかったが、父親はこの青年学校の指導にあたっていたので農家の仕事には携わっていなかったためである。馬を作り始めたのは昭和十五年頃だったが、他の小学生で馬を作っている子どもはあまりいなかった。祖父と、明治五年生まれの祖母は年老いており、父親は青年学校、兄たちは戦争に行っていた。田畑は母親一人で

耕していたので、自分が家のことを手伝うのは自然のことであり、藁草履も作っていたという。他の地域では、七夕馬の習俗として、当日の早朝に七夕馬を草刈りに連れて行く伝承も聞かれるが、片寄氏は毎朝四時に、自分の家の馬に食べさせる草を刈りに行っていたので、そのようなことはしなかったという。水力発電所に親が勤めていた子どもたちは、家の仕事はしていなかったので、そのような遊びもしていたかもしれないという。

七夕の日にはうどんを作って仏様にあげ、家族では、なたね油で天ぷらを作り、天ぷらうどんにして食べた。天ぷらの材料は、ナス、ジュウロクササゲ（インゲン）であったが、これらは味噌汁の材料にも使った。また、ショウガやミョウガ、シソも食べた。

七夕の日には、竹飾りもしたという。色紙やノベガミ（障子紙）を切って、「天の川」などと書いて竹に飾り、玄関に置いた。ノベガミは隣の集落（今の遠野町）ですいていた。楮をゆでて、皮を持って行き、加工賃を払って障子紙を作ってもらった。この集落でも、明治前には五、六軒は紙を作るところがあったがやめてしまったのだという。

七夕馬は小学生でも作れるような簡単なもので、これはおよそ十五分で出来た。片寄氏は、現在学校で子どもたちに馬の作り方を教えているが、二十四人の小学生が全員作るのに一時間半かかったという。この時、材料はすべて片寄氏が持参するが、馬一体作るのに藁一握りくらい必要で、人数分材料を用意するとかなりの量になる。神社の注連縄も今は作れる人が少なくなり、片寄氏は隣の集落からも頼まれて作っているが、稲をコンバインで刈ってしまうとバラバラになって注連縄に使えなくなるので、藁を取るためにわざわざ手で刈っているという。技術を伝えて行きたい気持ちはあるが、まずはこの材料の確保が難しいと片寄氏はいう。

【事例二】

三和町中寺関所の田子實氏（大正十三年生まれ）によれば、七夕馬は七夕の前日、六日の夜に作った。昔は、主食が米半分、麦半分だったが、この辺りでは小麦を比較的たくさん作っており、馬も小麦藁で作った。もっともこの季節には稲藁はないので小麦藁を使った。畑作以外には養蚕も盛んだったという。麦を刈るのは五、六月で、その後は乾燥させ、馬を作る七月まで納屋の中に保管しておいた。乾燥したままの麦藁は折れやすいので、馬を作る前に霧吹きで水をかけて湿らせ、扱いやすくする。一体を作るのにかかる時間は、慣れていれば三十分ほどである。

田子氏は、明治二十三年頃生まれの父親に馬の作り方を教わった。馬は各家で作っていて、他の家の分を作ることはなかった。ただし、男性が作るものとされていたので、男性不在の家に頼まれて作ることはあった。男性が作るのは、神にあげるものだからだと思うという。

ここでは、七夕には「オボンサマ」がくるといっているので、七夕の日が先祖の霊を迎える日であり、先祖の霊の乗り物として馬を作ったものだと考えられ、当時は乗り物が馬か駕籠しかなかったから馬を作ったのだと伝えられている。また、ご先祖さまに良く見えるようにといって、屋根のグシ（一番高い所）に馬をあげた。七日の朝置いて、お盆が終わる十六日まであげておく家もあれば、七日に下げる家もあった。あげたままでも自然に風化してしまうものである。しかし、屋根茅から瓦に変わってからは馬はあげていない。茅屋根だったのは昭和三十四、五年までであった。このあたりでは牛はあまりいないので、牛は作らなかった。お盆には燈籠を飾り、ミソカボン（晦日盆）といって、燈籠は三十日まで置いたものだった。お盆に門口で焚く火は「カガリビ」といわれているが、カガリビを焚くのは十三、十四、十五、十六日の四日である。

七夕には、小麦でスイトンや団子を作り、天ぷらも作って食べた。この他には、お煮染めを仏壇にあげた。今は新盆のときでなければ作らないが、以前は七夕の日に各家で盆棚を作ったもので、この棚にお煮染めや野菜な

どをあげた。

この他に、七夕に大人が井戸さらいを行った。きれいな水を先祖さまにあげるという意味があったのではあるまいかという。

田子氏が現在の場所に転居したのは昭和二十六年で、子どもの頃の七夕馬の体験は、隣接する宮町中寺という集落でのことで、その頃は屋根にあげる馬の他に、大きめの馬を父親に作ってもらって、この馬を引いて遊んだ。集落には同級生が十六人、小学生は三十人以上いたが、一緒に馬を引っ張って遊んだのは、心の合った五、六人である。この友だちとは独楽回しをしたり、登校するときに集まって野球をやったりしたものだった。馬を引く前に、馬の背にのせる草を刈りに行った。大人は四時には山に草刈りに出ていたが、その真似事のような気持ちで、六時半に朝食を済ませて、七時すぎくらいに草刈りに行った。この時の朝露が体につくと健康に良いといわれたが、早起きして働けということではなかったのだろうかという。また、土を踏むと脚気にならないといわれ、ほとんどが素足で草刈りをしていた。

野原で馬を引き、馬がひっくり返るたびに大騒ぎをして本当に楽しかったが、二、三日やれば飽きてしまって、最後にはこの遊び用の馬は捨ててしまった。背中にのせた草は自分のところで飼っている馬に食べさせた。どこの家にも、代掻きなどを行うために必要な農耕馬を飼っていた。

子どもたちは、七夕の竹飾りもした。色つきの紙を買って短冊にして竹に下げた。やらなければならないと決まっていた行事は貧乏でも行った。小正月の鳥小屋の行事では子どもたちが勧進を行ったが、七夕の色紙は親からお金をもらって買った。この竹飾りは大根畑に刺して団子を供え、虫送りの時に好間川に流した。かつては何でも川に流したもので、お盆に供えたものが川上から流れてくると、それを取って食べたりもした。

七夕馬は、見かけは似ていても、作り方は人によって全く違うという。馬の出来の良し悪しは一番人の目につく頭で決まるので、頭の部分を作る時の藁のねじり加減に注意する。麦藁はねじるのが難しいため、きれいにねじれて馬の面になったものが出来の良い馬である。

現在田子氏の住む集落でも、七夕馬を作ることができる若い人はいない。いわき市暮らしの伝承郷では、七月の第四日曜日に田子氏が馬の作り方を指導しているが、今後教えられる人がいるのかどうかはわからない。茅屋根だからこそ麦藁の馬も似合ったけれど、瓦屋根では似合わないのではないか、門松も近代的な家に合うような形に変わったのだという。

【事例三】

渡辺町洞岸の大友美江氏（大正七年生まれ）によれば、当地では、兄妹が五人いれば五匹七夕馬を作り、子どものいない家では二匹（雌雄かどうかはわからない）の馬を作って、竹飾りの下に置いた。牛は作らなかった。七夕の時期は稲藁が乏しく、また稲藁は俵を編むために貴重品でもあったので、馬の材料には麦藁を使った。この時期は入梅にあたるので、少し早めに麦を刈って、ハセにかけて乾燥させる。麦は、麦藁が傷まないよう脱穀した。

馬は、旧暦の七月六日に作った。この時に盆棚も作った。他の家の七夕馬を作ったことはないが、女性は作ることが出来なかった。父親も馬は作っていたが、教わったというよりも、よその家の上手な馬の作り方を盗んで、自然に身につけた。馬の大きさは横がおよそ三尺、九十センチほどで、高さは二十センチほどである。作るのにかかる時間は三十分ほどであった。

馬は竹の七夕飾りの下に繋ぎ、地面の上に直接置いた。竹は今年出た新しい竹を用いた。太さは指の太さほど、長さは子どもが持ち運びできる大きさの竹だった。この竹を地面に刺し、「天の川」「星のしずく」や「いろはにほへと」、「奥山にもみじ踏み分け鳴く鹿の……」といった百人一首の歌を書いた色紙の短冊を下げた。

いわき市暮らしの伝承郷　館内のカラクリ舞台の七夕馬

いわき市暮らしの伝承郷　敷地内の民家のグシ（上部）に上げられた七夕馬

好間町大利小川崎の片寄久四郎氏

片寄氏に七夕馬の置き方を再現してもらう。入口の左右に玄関に首が向くように置く

三和町中寺関所の田子實氏

渡辺町洞岸の大友美江氏の家の近くの馬頭観音（中・右）と馬力神（左）の石塔

仙台市歴史民俗資料館で所蔵する七夕馬．採集地は不詳

宮城県栗駒町文字地区佐藤家の七夕馬（縮小サイズ）。東北歴史博物館 及川宏幸氏製作

千葉県立房総のむら実演体験会場

材料のマコモ

講師の齊藤孝雄氏が胴の形を作る麦の胴中を入れるところ

手前の箱の中に胴中を押し込む時に使うタタキ（木槌）がある

竹飾りを押し込むツバクシ

竹をほぐして房飾りにするための道具（右端に釘が打ってある）と櫛

ツバクシを使う齊藤氏

齊藤家の七夕馬とお供えの野菜、バラマンジュウ（平成 18 年 8 月 7 日）

齊藤家の稲荷の祠に上げられた七夕馬

子どものいる家では、子どもが馬の背中に草を刈って結わえ付け、馬についた手綱を持って近所を引き回して遊んだ。子どものいない家では、馬は竹飾りの下に繋いだままにしていた。草は、田圃の畦から刈ってきた。馬を引っ張るときは馬の足に踏ん張りが必要なので、稲藁よりも固い麦藁の方が適していた。大友氏は小学校五、六年生くらいまでは引っ張っていたが、女児はよほどお転婆な子でないとこの遊びには参加なかった。刈った草は遊んだあと飼っている馬にあげた。

遊んだ後の馬は母屋の屋根にあげるか、馬頭観音のところにあげた。屋根の上にあげたものは、風などで転げ落ちてしまったら堆肥箱やゴミ箱に捨てて、馬頭観音にあげたものはそのまま風化するまで置いた。馬頭観音は各集落にあり、大友氏の住む渡辺の洞岸の集落にもある。

七夕に特別に食べる物はなかったが、旬の野菜、カボチャなどは食べた。

現在は、馬の材料になる麦がない。戦争前に馬はどこでも作っていたが、麦をつくらなくなってからやめてしまった。大友氏が考える良い馬は、形が良くできたものである。特に、足の太さが均等で、がっちりとふんばるようになっていて、背筋がすっきりと伸びているもの、均整がとれている馬が良い馬であるという。

② 千葉県茂原市の七夕馬

千葉県では濃密に七夕馬習俗が伝承されている。榎美香は、七夕馬の形態の地域差を指摘し、その形態を、①東葛型、②印旛沼・手賀沼型、③香取型、④海匝型、⑤九十九里型、⑥内房型、⑦安房型に分類して[11]〈表1〉を作成している。千葉県内の七夕馬の形態差は、馬の足形や頭部などに顕著に見られるとともに、一定の領域に同形のものが広がっているところに特色がある。

千葉県内で、もっとも装飾性の高い七夕馬を生産していたのが、茂原市の大芝地区である。『大芝の今昔』を著した星野正は、七夕馬の誕生について、①三山講の人々が三山に参詣した折り、馬の民芸品を購入した。また、馬喰が福島方面に馬を買いに行った折、馬の民芸品を購入した。「朝のでがけ」は馬喰が東北で覚えてきたもの、②善光寺参り、佐渡の日蓮上人の遺跡巡りの信仰による旅の途中、長野、新潟方面のマコモ馬を見てこれを真似た、③越後の毒消し売りが越後の七夕馬を村人に教えた、④たまたま大芝を通りかかった旅僧が村人の貧しい生活を見て、お盆前に少しでも現金収入を計るためマコモの馬の作り方を村人に教えた、という由来を考察している。[12] このうち①については、千葉県内には三山講に加入している集落が多いが、その集落のすべてが七夕馬を作っているわけではないので、明確な説明にはなっていない。また、いつごろから人々が七夕馬を買い求めるようになったのかを明らかにしなければ解決しないことである。しかし、星野が次のように指摘した大芝に七夕馬の製作

表1 七夕馬形式分類と分布表

型式	行事（意味）	形態	分布域
東葛型	高所に向かい合わせて飾る（先祖迎え）	足細形	東葛飾郡・東京都東部・埼玉県東部・群馬県南西部
印旛沼・手賀沼型	水辺に流す（先祖迎え）	足細形	印旛沼・手賀沼周辺
香取型	子供が草刈りに引いて行く（意味不明）	足太形	香取郡周辺・茨城県南部
海匝型	子供が草刈りに引いて行く（意味不明）	巻き付け形	海上郡・匝瑳郡周辺
九十九里型	子供が草刈りに引いて行く（意味不明）	たてがみ組みあげ形	九十九里～長生・夷隅郡
内房型・その他	子供が草刈りに引いて行く（意味不明）	頭部4分形・その他	内房地域・その他
安房型	窓辺に向かい合わせて飾る（先祖迎え）	チガヤ型	安房郡

榎美香「千葉県の七夕馬」（『千葉県の七夕馬　草で作ったウマとウシⅢ・Ⅳ』33頁から引用）

技術が根付いた理由には妥当性があるように思われる。[13]

土地が痩せていて水田が少なく畑が主で沼や原野が多く村人の生活は苦しかった。生きる為にたえず副業を考え現金収入を計るよう努力した。（中略）大芝で七夕馬が盛んに作られるようになった理由を掘り下げてみると、第一材料はただ、第二労銀が安い、第三値段が安い、第四制作技術の共同開発、第五制作技術の秘密保持である。

（一） 昭和三〇年代までの七夕馬作りと販売

現在は、製作者もごくわずかになっているが、この技術の保持者である齊藤孝雄氏（昭和十六年生まれ）から大芝の七夕馬についての聞き書きをまとめると次のようになる。

齊藤家は元禄くらいから大芝にあり、古くは庄屋だった。現在は祖先が同じ齊藤姓の家は大芝に三軒ある。氏神は玉前神社で、五〇〇メートルほど先の真福寺（真言宗豊山派）の檀家である。真福寺は無住の寺なので、お盆の時は、長南町にある本寺から棚経をあげにきてくれる。

齊藤氏は七夕馬の意味について、子どもの頃から聞いたことはなかったが、これは七夕と結びついたものではなく、むしろお盆と結びついたものであると思っていたという。父親が早く亡くなったので、馬の作り手は専ら母親で、姉が飾りの部分や頭縛り（たてがみの部分を作る）を担当していた。他の集落には馬の製作技術は門外不出とされ、嫁に行く人には教えず、逆に嫁に来た人には教えるという暗黙の了解のようなものがあった。齊藤氏は小学校三年くらいから、馬と対になる簡単な牛を作り始めた。大芝の七夕馬の特徴として、馬と牛をセットで作る際、それぞれの大きさが著しく異なり、装飾に差があることである。牛がどうして小さいのかという由来はわからないが、昔から大きさは変わらない。齊藤氏は、牛の動きはのんびりしていて、人間の歩調に合っているし、育てるのも楽なので、大芝ではだんだん牛を飼うようになったが、もともとは人と馬との関係の方が牛よりも近かったことの表れではないかという。齊藤家では飼ったことがないが、大芝地区では牛小屋を建てて牛を飼って田畑を耕していた。屋号がクラヤという家では、牛の鞍を専門に作っていた。

七夕馬作りは副業で、大きな現金収入だったので、食べていくために欠かせないものという意識があった。七夕馬は際物なので、十日くらいで集中して作らなければならない。その間は一日中馬作りに精を出し、畑の草むしりもせず、夜は蚊帳を吊ってその中で作った。家族総出で取り組んだので、一番の活動時期にあたる七月二十日から八月六日までは夏休み中であったが、齊藤氏も午前中に牛を二十匹作った後、昼寝をしたり夏休み帳の宿題をしたりした後、また牛を作るというように休みを返上して必死に取り組んだものだという。

大芝地区が商品として七夕馬を作るようになったことについては、江戸時代、大芝が米も麦もとれない湿地帯で苦しい生活を強いられていたため、出羽三山の行者が身近にあるマコモを使った馬の作り方を教えたのだと聞いているが、齊藤氏自身は、よそでは材料が揃わなかったためだろうと考えているという。[14]

七夕馬の製作には、マコモ、ガマ（ヒメガマ）、小麦藁、スゲ、シュロ、アオギリ、竹（真竹）の七種の植物が材料として必要である。マコモは馬の全身に用い、ガマは胴や足の部分のマコモをしばる。小麦藁は、束にまとめて茶筒のような円筒形に整えた胴中（どうなか）と呼ばれる馬の胴の形の基礎にしたり、両足の基礎にしたりする。赤いスゲは馬の胴体に巻き付けて飾りにする。緑色のシュロは首と顔の二ヶ所を縛る。アオギリは水につけてドロドロに溶かし、繊維だけを取り出して赤色に染めたものでたてがみを飾る。大芝の七夕馬を最も特徴づけるものが竹の飾りである。真竹を細かくほぐし、赤、牡丹、紫、緑、黄色などに染めて、馬の首の両側

と尻尾に挿すと、どこよりも華やかな七夕馬が出来上がる。

材料は、ほとんど大芝で調達できた。たとえば、マコモは齊藤家の前の道路から東側にある沼地にほどよい太さのものがたくさん生えていた。マコモは干すと半分の量になるので、分量はそれを計算に入れて刈り、虫が付いているようなものは捨てる。ただ、スゲだけは地元では手に入らなかった。スゲは三ケ谷という集落に取りにいった。大芝で実際に馬を作っていたのは二十軒ほどの家だが、スゲはこれらの家の人全員で取りに行く共同作業となった。三ケ谷は、民謡「朝のでがけ」にも歌われるスゲ笠の産地として知られ、スゲを栽培していた。三ケ谷では白いスゲ、大芝は赤いスゲというように、利用する部分が違うので分けてもらうことができた。七月二十日ころ、大芝集落から三ケ谷まで三キロほどの道のりを歩いて、スゲを抜きに行った。これをスゲヌキというが、刈るのではなく抜いた方がスゲは使いやすいからである。齊藤氏は今も抜いて使っているが、面倒な人は刈って使うこともある。抜いたスゲは、大人一束、子どもは半束というように、家々に分けて持ってくる。大芝からはスゲを貰いに行くが、三ケ谷から大芝に何かを貰いにくるということはなかった。現在ではスゲ笠は作っていないため、三ケ谷でスゲのあった場所は池になってしまった。齊藤氏も母親に付いて、スゲヌキに行ったが、材料集めはスゲヌキが最初で、それからマコモ刈り、ガマ刈りを行った。刈り取った材料は、マコモは一日半、ガマ、スゲは二日半から三日天日で干す。マコモは土の上で乾かすと干し上がりに時間がかかるので、地面に梯子を敷いて風通しを良くして乾かすこともあった。マコモは干しても青い色を保っていることが重要なのである。かつて曇りが続いた時、母親が竈の火の脇でマコモを干したことがあったが、真っ赤に変色して使えなかった。七月二十日までにすべての材料を揃えて干しあげて馬を作れば、二十四日に開かれる茂原の六斎市に出荷できた。

市では馬と牛をセットにして二十円から二十五円くらいで売っていた。茂原の六斎市で店番をしたこともある。かつては本町でも市を開催していた。母親に頼まれると、本町の一画にある親戚の金物屋の軒先を二〇〇円ほどで借り、馬を販売した。店先の台や土間を借りて、十匹ほど馬を並べる。毎年買いに来る人はだいたい決まっていた。大原でもそんなところがあったのではないかという。茂原では四と九のつく日に市が立つので、七月二十九日と八月四日が七夕馬を売る勝負の日だった。

作った馬は、齊藤家では茂原の六斎市で売る他は、仲買人に売って、自分たちでは売りには歩かなかった。仲買人は大原や近郊の人が多く、リヤカーや自転車を引いて山手の方や海岸の方まで売って歩いたようである。「明日夕方までに二十匹作ってくれ」といった仲買人からの要望を聞き、これに合わせて馬を作った。大芝では自分たちで売りに行った家は、地区の中の五、六軒で、昭和三十年代前半くらいまでは売りに歩いていたようである。

大芝の馬は、大多喜、国吉（刈谷）、大原、長者、太東（椎木）、一宮、本納の市でも売られた。夷隅郡にあたるところが多かった。二十キロほどある大原、一番遠い大多喜にも自転車で行ったが、砂利道で坂もあって大変だったと思うという。勝浦には行かなかった。材料は各市に間に合うようにその都度調達しに行った。市の時は、大芝地区の人々は一斉に売りに行った。一回に自転車に二十匹、多い人で四十匹の馬を積んで運んでいったが、十人まとまって行っても二〇〇匹しか運べないので、そのくらいの量はすぐに売れてしまう。そのため激しい競争はなかったが、各家で購入意欲をそそるような特徴を出すことはしていた。特に馬に付ける竹の房飾りの色は各家で少しずつ変えたりしていた。夷隅では馬が足らなくなり、その辺りに生えているマコモを刈ってきてにわかに作って売ったこともあった。そのくらい良く売れた。こうした馬を買うのは、だいたい近郊の農家

の人であった。六日が七夕馬を売る最後の市になるので、その後、残った馬は川に流してしまった。

市では野菜の他に三ケ谷のスゲ笠や夷隅の梯子、長南のゴザ、大原の魚貝など各地の特産物が売られていた。このように、市の存在が各地の特産物を活性化させていたことになる

馬を買った近郊の農家の家では、七日に飾って馬にご馳走をあげ、終わると稲荷様や荒神様にあげたという。また、子どもたちが馬を引いて草を刈りに行ったという伝承も聞かれる。

齊藤氏の義兄にあたる佐藤信夫氏（昭和七年生まれ）は、子どものころ茂原の山の手に住んでいた。七日前には七夕馬の販売人が来るので、毎年一匹母親に買ってもらうのが楽しみだった。竹の房飾りがきれいで魅力がある玩具だと思っていたが、齊藤氏に聞くまではそれが竹で出来ているとは思わなかったという。中には子どもが馬に乗れるくらい大きな馬を注文する家もあって、その馬には胴中や足に竹の芯を入れて麦藁を補強した。七日が過ぎると、馬は玄関の庇に乗せた。

佐藤氏が昭和五十七年に山武地方の小学校を訪問した時、教材に使われた歌の歌詞に「カヤカヤカアヤ　カヤッケドコダ　モバラノシュクダ　アサネボヤロドン　ハヤクニオキロ　アサネボナゴドン　ハヤクニオキロ　キヤガレヤ」というものがあった。[15] これは当地の子どもたちが七夕馬を車に乗せて草刈りをする時に歌ったものだという。ヤロは男児、ナゴは女児を指している。「カヤカヤ馬」は山武地方の七夕馬の呼称で、「茂原の宿」は大芝のことである。山武地方でも大芝が七夕馬の産地であったことがうかがえるという。[16]

齊藤氏の妻の歌子氏（昭和十四年生まれ）は長生郡の長柄の出身である。ここでは、七夕には馬の頭がついた木の台車を引っ張って、早朝に草刈りに行ったという。台車そのものが馬に見立ててあるようなもので、車にのせた草は後で牛に食べさせたという。

齊藤氏は馬を引いたことはなかった。生産者側はそんな時間はなかったのではないかということだが、玄関前に馬を飾るための敷き草を揃えるために早朝草刈りに行った。敷く草は青いものならなんでも良い。ズボンがびしょびしょになるくらいの朝露があって、朝露を含んだ草は柔らかかった。刈り取った草の上に馬と牛をのせ、五穀豊穣と牛馬への感謝の気持ちから、自分の家で取れたキュウリ、ナス、カボチャなどの野菜の初物をあげた。また、自分たちも七夕から初物を食べていいことになっていて、この日に食べられるように種子を蒔いていた。この他にバラマンジュウを供えた。七夕の前日にこし餡をつくり、当日の朝、小麦粉に重曹を入れた生地をまるめ、この中に餡を入れ、皿代わりのサルトリイバラの葉の上にのせて蒸したものである。昔は家族が多いので、三十個くらい作っても一日で食べ尽くしてしまった。バラマンジュウはお盆には作らず、七日盆に作るものだった。お赤飯を馬にあげる家もあった。馬は七夕が終われば、荒神様か稲荷様にあげ、朽ちるまでのせておいた。

七夕の竹飾りは、やる家もあればやらない家もあり、行事のあとに田んぼに刺すようなことはなかった。七夕はお盆の始まりと考えていて、新盆の家はこの日に棚釣りや盆ゴザ作りを行った。棚は竹四本を井桁に組み、荒縄で網を編んでいく。新盆には三夜講（二十三夜講）の講中や隣組を呼んで棚釣りをした。大芝では講が二組に別れていて、同じグループを呼んだ。講員は、葬式の穴掘り、湯灌などの手伝いも行っていた。現在は十六軒が講員となっている。新盆ではない家では、盆の始まりは十三日で、送り盆は十五か十六日、一般的には十六日が多い。お盆の時には、ナスやキュウリの牛馬は作らなかったという。

（二）　現在の七夕馬作り

齊藤氏自身が馬を作り始めたのは、四十代になってからのことで、今から二十年ほど前からである。昔は、親の仕事の邪魔になることと材料を無駄にできないということで、母親の真似をして馬を作ろうとは思わなかった。子どもの頃には牛しか作ったことはなかったが、母親の馬を作る過程を見ていたので、順番は漠然と覚えていた。本格的に馬を作ってみたいと思い立ち、それらを手帖に書き出し、うまくいかないところは隣の齊藤弥一氏（大正十三年生まれ）に指図してもらって現在の形になった。馬の形は似ているようで、前足が長かったり胴中が長かったりと、家によって異なっている。齊藤氏は隣の弥一氏に手ほどきを受けたので、ほぼ同じ馬の形である。実際に作ってみると、子どもが作ったのでは売り物になるようなものはとてもできないと思ったそうである。

現在も材料は七種類の植物を用いている。マコモは、車で茂原街道を南へ二十キロほど行ったところの笠森観音の裏側の方にある休耕田で調達している。スゲはその途中の長南町で質の良いものがある。隣家の娘さんがお嫁にいった家の休耕田で抜いてくる。千葉県立房総のむらの体験学習のために刈ってきたマコモは、乾かすと半分になってしまうため、四、五回通って確保した。朝天気が良い日に取りに行くが、仕事の合間に行くので一週間に一、二度行くことになる。マコモは一気に干さないときれいな青に仕上がらない。刈ってきたものは汚いものをふるいにかけ、夕方までにジリジリと葉がよれるくらいになるまで干す。もう一日乾かして仕あげになる。干す場所は区画整理で舗装した道路の上である。ここは家の畑のところにあって、車の通りが少ないので道路を半分塞いで干している。舗装の上は乾くのが早いので、道路の上にそのまま干す。マコモはとにかく青いものが良く、色が「ふけた」ら価値が下がる。また、干し草の良い香りが馬の価値をあげるのだという。

ガマは適当なところに生えているので刈ってくる。ガマは四種類あるが、干すとちょうど使いやすい幅になるヒメガマを使う。シュロは家に植えているものを使う。竹は屋敷の一番はずれにある。アオギリは昨年までは隣の家に貰っていたが、今年は違うところから貰った。植えれば早く大きくなるアオギリは、親指くらいの太さになった二年もののアオギリが良く、皮をむいて水に二週間くらいつけておくと、腐って繊維が残る。この時ひどい悪臭がするそうである。小麦は七夕馬のために必要な分だけ蒔いて、一抱え分の小麦藁を取っている。これで十五匹分くらいの七夕馬の胴中と、前足、後ろ足の芯の分になる。以前は小麦を休耕田で作っていたので貰ったこともあるが、今はコンバインで刈るためにバラバラになってしまうので使えない。

七夕馬を作る時には、胴中を押し込む時に叩く木槌のタタキや、竹をヘラ状にして先をとがらせて竹の房飾りを首や尻尾に押し込むためのツバクシなどの道具を自分で作る。これらは売り物にはなっていないので、今後も自分で作るしかないという。

この他に竹の房を作るための道具で、板に釘を刺したものを作る。竹は葉の出方の感じから良い頃合いをみて、青い皮を切り出し（刃物）で剥ぐ。これを槌で叩いてほぐし、板に釘を刺した道具で粗挽きする。白い房ができたらさらに櫛でといて細くし、一晩水にさらして翌日から一週間ほど干す。櫛は十年ほど前に買った柘植の梳き櫛で、今も使っているが歯が減ってしまった。プラスチックや金物の櫛では一回でボロボロになってしまう。出来上がった房を染める時は、最初黄色で染めた後、赤色の染め粉を足して別の色を作って染めるというように、染める順番を考えながら作業をする。染めたくない部分があれば、その部分を糸で縛っておく。

麦藁は一本の長い束にして結び、胴中の長さに切っていく。結び目を一匹ずつの間隔でしばり、結び目と結び目を包丁か押し切りで切る。専業的

に作るからこそ、また大量生産するからこそ、こういう知恵が生まれたのだという。

齊藤氏が「うまくいった」「良い馬ができた」という基準は、頭の部分が下を向いて、足が左右均等で、躰が前のめりになっていないなどであるが、特に重視しているのは頭の形だという。作る人によって良い馬の基準は異なるので「これだ」というものはないが、それぞれ自分の中では決まっている。他の人の馬は後ろ足が後方に向いていたり、足が長かったり、よじり方が違っていたり、頭の形が大雑把だったりといろいろで、従って馬を見れば誰が作ったのかがわかるのだという。

（三）七夕馬作りの継承に関する問題点

現在、大芝で七夕馬作りの技術保持者は三軒で四人しかいない。大正十年生まれ前後の世代（八十代）、次は七十代、そして齊藤氏の世代で、後には続いていない。

七夕の時に、玄関前に馬を飾ることを続けている家はほとんどないなかで、齊藤氏は平成十八年も八月七日の朝六時に草刈りに行き、馬と牛を飾って、バラマンジュウ、お赤飯、野菜などを供えた。

このように、大芝の七夕馬作りの技術継承は難しいところにきている。齊藤氏は問題点を次のようにあげる。まず若い世代に技術を継承しようという動きが地域にないことである。作り方を教えて欲しいという人がいれば、積極的に教えたいが、そういう人はなかなか現れない。二、三年前まで学校の総合学習で七夕馬の作り方を教えてほしいと依頼されて子どもたちに教えたこともあったが、材料を揃えられる時期でないと作れないことが小学校では理解されていないようである。

次に、商品としての需要がないことである。マコモは刈ってきたものから馬に使用できる分を残すと、三分の一くらいの量になってしまう。遠い場所に刈りに行くのも大変で、それだけ苦労しても昔のように買う人はいないので、これから作り続けようと思う人が次々に現れるとは考えにくい。材料を購入して用意するとしたら、相当高価なものになってしまうのではないかという。

最後に、もっとも大きな問題は、材料の確保が難しいことである。技が残っていても、材料がなければ形にならない。七夕馬製作には七種の植物が必要である。竹、シュロ、アオギリ、ガマは比較的手に入りやすいが、マコモと麦藁がなかなか入手できない。マコモはないわけではないが、湿地帯に流れ込む下水に栄養があるせいなのか、マコモの葉や芯の部分が太すぎて使えない。小麦は、今は生産農家が少ないため、すぐに麦畑に雀がむらがり、雀の重さで麦が倒れてしまうので使えなくなってしまう。それでも、齊藤氏はマコモを何か他の材料に代用しようと思ったことはないという。稲藁で馬を作った人もいるが、形は似ているが全く違うものである。材料の確保のために、たとえば、北海道から麦を取り寄せたり、潮来あたりからマコモを取りよせたりといった材料供給のネットワークのようなものを行政が作ってくれることを期待している。

齊藤氏は、平成十八年七月二十九日に千葉県立房総のむらで開催された七夕馬の体験学習の指導にあたった。この夏には茂原の美術館でも別の人が七夕馬作りを教えていたが、博物館や美術館からの要請に応えるのは、技術を継承したいという人が出てきてくれるのではないかという期待からである。技術は一度身につければ忘れないもので、やろうと思えばいつでもできる。年に五、六回、二年ほど続けて馬を作れば覚えられるものだという。今後も、材料と自分の体がもてば技術は教えたい。体験学習の材料を用意するため、七月は半月で一週間以上の時間を費やしているので、本気でやってくれる人が出てくれれば材料の揃え方も教えたい。逆に、材料を揃えてくれるなら教えてほしい、ということであれば七夕馬の技術は自分

の代で終わってしまっても仕方がないという気持ちもある。それでも齊藤氏は、昔からの伝統的な民芸品だから残したいという気持ちは強く、家の前に馬を飾ることも続けたいと思っているという。

三　七夕馬の商品化と民俗技術

前章では、いわき市と茂原市の七夕馬製作について紹介した。これらを比較すると、七夕馬が異なる状況で製作され、この状況によって馬の製作技術の差異が生じていることがわかる。

いわき市の七夕馬は各家で作られたものである。茂原市の大芝地区でも、おそらくある時期までは同様だったのではなかろうか。しかし、大芝の馬は六斎市を媒介として「商品化」されたのである。市に集まる人々の範囲では、七夕馬は大芝の特産物として認知され、年中行事の飾り物商品として定着した。三ケ谷のスゲ笠、長南の盆ゴザなどと同様に、人々は大芝の七夕馬を特産物として認知したのであろう。そして、大芝では七夕馬を商品として製作する意識を持ったからこそ、その製作過程で独自の技術を生み出したのである。

独自の技術というのは、まず商品価値を付加する装飾性である。いわき市では麦藁だけで馬を作るが、茂原市大芝地区では七種類の植物を材料として使っている。特に竹の房飾りの技法は他の地域には見られず、鮮やかな色彩は人々の購買意欲をそそるものであった。

また、七夕馬は際物であることから、一気に作りあげなければならない。そのため、短期間で大量生産が可能な技術があみだされている。たとえば、馬の胴中は、小麦を長いまま束ね、胴中の長さごとに縛った紐を目安に切り落として、一定の長さの胴中を一度にいくつも作り出すようにした。

さらに、七夕馬を製作するために、タタキやツバクシ、竹をほぐす釘付きの板など、専用の道具が考案されている。各人の手作りであり、その種類は多くはないが、物を作るために専用の道具を持っているということは、ある意味では「職人的」な仕事である。

大芝地区の七夕馬のあり方からは「民俗技術の工房化」ということがいえるのではなかろうか。そこでは、どの家でも作っていた七夕馬作りの民俗が、商品になることによって、その技術が特化され、家の工房化が進んだ。しかしこのことは、一方では、周辺地域における七夕馬作りの衰退を招いたともいえよう。

江戸の年中行事は近世から、農村で作られた際物に支えられていた。たとえばしめ飾りについて、『農閑の副業』には次のようにある。[17]

東京東郊の農村は、近世後期から東京の都市部の需要を満たすためさまざまなものを生産してきた。しめ飾りもそのひとつではあるが、生活必需品とは異なり、江戸（東京）の儀礼文化を支える特異な生産品である。その他の生産物とは異なり、しめ飾りは限られた期間で取り引きされる、「際物」であり、そのため独特の流通経路ができた。東京東郊農村でしめ飾り作りが行われた理由をまとめると、水田稲作地域で、かつ低湿地帯であり、しめ飾り作りの材料の取得に適していたこと。しめ飾りの製作期間が比較的農閑期にあたり、農家の作業暦にそっていたことなどがあげられる。東京東郊農村は、他の東京近郊農村と比較して、農家一軒あたりの耕作面積が少なく、小作農家が多い。そのため、より集約的な読菜栽培を行なう必要があり、先駆的な疏菜の栽培方法が発達した。この地域に多くの副業が発達したことも、同様に耕地面積から収入が限られていたということがひとつの事由となっている。なかでもしめ飾り作りは、疏菜栽培を多く行わない集落や湿田の多い集落で行なわれていたといわれ、通常の耕作収入に期待ができない地域の副業であった。

同様のことは大芝地区にも当てはまるのではなかろうか。七夕馬が、従来から盛んであった六斎市に乗って商品としての価値が生まれていったという推移である。

民俗研究の視点からいうなら、副業としての七夕馬作りのあり方とその流通実態を明確にすることによって、年中行事用品を購入して行うようになった七夕行事の変遷が明らかになる。本来は家ごとに作っていた七夕馬が、製品として流通することで七夕行事が持続してきたことは明らかで、それは千葉県における七夕行事の変遷過程の典型的な事例であると考えられる。

大島暁雄は『上総掘りの民俗』で、農村における副業的に農間稼ぎとして行われる技術についての解明を試み、民俗技術という視点を提案している。まずは上総掘りの技術からは「民俗的な地盤が創造してきた生活・生産技術は、常民にとどまらず職人にまで視野を広げ、これを連続してとらえる必要性」を指摘する。また、上総の唐箕を事例に「特定民具の製作の実態と民具の伝播・普及の要因は、地域的要因と技術の再生産のシステムにある」とし、そこには「一般人が見よう見まねで技術を修得し、その一部が職人化して行く形態」と「一応の技術的基盤が整備されており、それが共同作業等を通して技術の修得が図られ、集団的に技術が継承して行く形態」があるとしている。そして「技術の継承にかかわる特性として、徒弟制度を前提とする技術を除いて、技術の伝授と修得が集団的になされ、その結果技術上の系譜関係が必ずしも明確ではなく、特定の修行形態や修行の期間・内容等が設定しがたい、加えて技術の修得や、独立に際しての儀礼や慣行が存在しない例の、大幅に見られることが予測されるようになったのである。」として、民俗技術にみられる特定集団への帰属意識を明らかにしている[18]。

大島のいう技術の集団的継承は、大芝地区全体における七夕馬製作の工房化に示されている。このことはスゲヌキの共同援助にうかがえる。さらにいうなら、ここにはムラとしての集団的な工房の内部に、家ごとの工房が成立しており、「工房化の二重構造」という実態を見ることができる。

四　民俗技術の継承ために

いわき市、茂原市の事例からもわかるように、地域社会における七夕馬製作の技術伝承の現状は頼りないものとなっている。本章では、七夕馬の製作技術に対し、地域博物館がどのような取り組みを行っているのかについてまとめてみたい。

七夕飾りが全国的に知られ、七夕馬の伝承も広く残る宮城県仙台市では、仙台市立歴史民俗資料館が七夕馬の伝承を記録し、資料館の報告書『足元からみる民俗』に掲載している。たとえば第四号には泉区福岡蒜但木[19]、第五号には若林区下飯田[20]、第十号には太白区山田の大里家の七夕馬についての記述がある[21]。

太白区山田の大里家では次のようにある。

七夕に二匹の馬を朝作り、七夕飾りの下に置く。飾りには新調した子供の着物も飾る。これは子供が丈夫になるよう願って、また芋の葉の上の水で墨をすって、願い事を書いた。願い事がかなうといわれている。七夕の笹を大根畑に立てた。馬は昔は麦わらで作ったが、今は無いので藁で馬を作っている。田の神様はこの馬に乗って田巡りするので仕事は休む。畑に行くなといわれた。

大里家では竹の七夕飾りに、子どもが着る服が下げられ、この下に二匹の藁馬がしばりつけられていることがわかる。さらに、この馬はもともと麦藁で作られていたものが、現在は稲藁に変わっていることなどもわかる。このような継続した調査の記録の積み重ねは、民俗が途切れた場合でも、

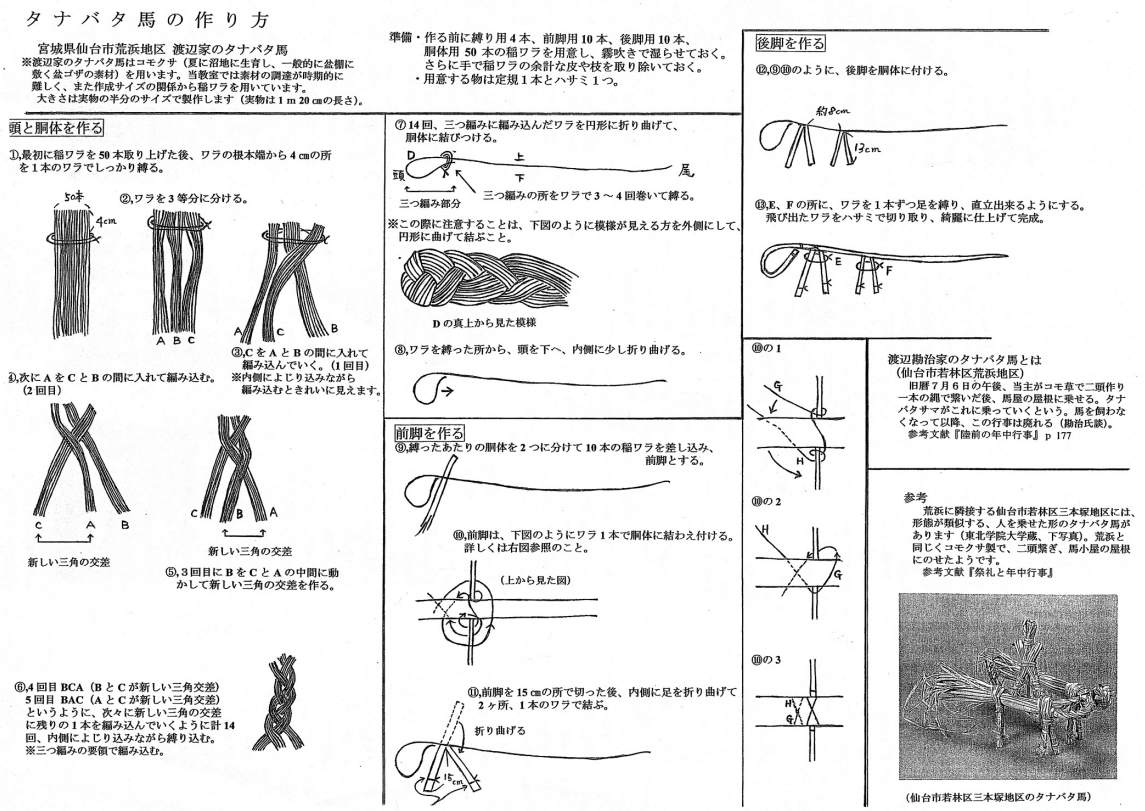

図1　東北歴史博物館　体験教室　くらしのわざ2「七夕馬を作ろう」
平成17年7月9日（土）配布資料から転載　及川宏幸之氏作成。

再びそれを掘り起こす際に役立つ財産となっていくのではなかろうか。

宮城県多賀城市にある東北歴史博物館では、学芸員による民俗技術の保存が行われているといっても過言ではないかもしれない。学芸員の及川宏幸氏は、宮城県内の七夕馬の製作技術保持者からその技術を学び、館で開催される「くらしのわざ体験教室」で、宮城県内各地の七夕馬を縮小サイズで製作する実習を担当している。

毎年七月半ばに行われれるこの実習では、自らが製作の指導にあたり、平成十四年は宮城県宮崎町北川内大平の橋本家、平成十五年は大和町吉田升沢地区の早坂家、平成十六年は栗駒町文字地区の佐藤家、平成十七年は仙台市若林区荒浜地区の渡辺家に伝承された七夕馬を製作した。当日配布されるプリントには、それぞれの製作過程を図式化したものが印刷されている（図1）。

民俗技術保持者がその技術の継承を強く望むとき、行政は何ができるのかを考えた場合、地域に密着した活動を継続的に行える博物館の存在は大きい。

千葉県立房総のむらでは齊藤氏、いわき市暮らしの伝承郷では田子氏という技術保持者が七夕馬の体験学習の指導にあたっている。齊藤氏が言うように、材料の用意が負担になってもそれを引き受けるのは、こうした体験を通して、継承者が育つかもしれないという可能性に期待してのことであると思われる。七夕馬の場合、材料の確保は大きな問題点だが、房総のむらでも暮らしの伝承郷でも、敷地内で小麦の栽培をするなど、材料調達につながる実践を行っている。こうした博物館や資料館は、今後民俗技術継承の恒常的な窓口となり、民俗技術継承の行政的な要所となっていくのではないかと期待される。(22)

末筆ながら、本稿を書くにあたり、いわき市暮らしの伝承郷の氏家武夫氏、駒木根栄一氏、渡辺彩氏、仙台市立歴史民俗資料館の佐々田弥生氏に

は多大なるご協力をいただいた。心より御礼申しあげます。

註

(1) 若月紫蘭（保治）著『東京年中行事』一九一一年　春陽堂　一一三頁
(2) 『家例年中行事』一九八六年　東京都世田谷区教育委員会編・刊　一五七頁
(3) 『日本民俗地図』第一巻　文化庁刊　一九六九年
(4) 田中宣一著「七夕まつりの原像」『日本民俗研究体系』第三巻周期伝承　一九八三年　國學院大學刊　一六九頁
(5) 倉石忠彦著「タナバタ伝承の禁忌に見る地域性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第五十二集　一九九三年　一六一―一八二頁
(6) 高谷重夫著『盆行事の民俗学的研究』一九九五年　岩田書院
(7) 『千葉県の七夕馬　草で作ったウマとウシ　七夕行事を中心に』Ⅰ・Ⅱ　一九九八年　千葉県立房総のむら編・刊
(8) 『千葉県の七夕馬　草で作ったウマとウシ』Ⅲ・Ⅳ　二〇〇〇年　千葉県立房総のむら編・刊
(9) 大須賀筠軒著・夏井芳徳翻刻『磐城誌料歳事民俗記』二〇〇三年　歴史春秋社　八十二頁
(10) 西行著・宇津木不言行ほか『山家集・聞書集・残集』二〇〇三年　明治書院　三三三頁
(11) 前掲(8)二―十二頁
(12) 星野正著・刊『大芝の今昔』一九八六年　第九章第三節第三項「大芝の七夕馬」
(13) 前掲(12)第九章第三節第三項「大芝の七夕馬」
(14) 筆者は、鶴岡市羽黒町手向を訪れた際、大進坊という宿坊の前で「千葉県茂原市上永吉行人一同」と書かれた旗を見たことがある。実際に大芝では三山講（正式には八日講といわれている）の行人も多いことで伝えられてきた話のようであるが、手向で聞いたところ、出羽三山周辺では七夕馬を作っているところはないということであった。
(15) 佐藤信夫著「甦った七夕馬　その一」『茂原市広報』四五三号　一九九二年一月

佐藤氏は茂原市文化財審議会委員を務め、七夕馬作りの過程を克明に記録している。その一部は「蘇った七夕馬　その二」（一九九二年七月　四五九号）、「その三　青桐から繊維を採る」（一九九四年七月四八三号）、「その四　伝承文化の秘伝を後世に」（一九九六年七月五一〇号）、「その五　竹の房と青桐の繊維を染める」（一九九七年一月五二二号）の五回に分けて連載された。
(16) 梶山俊夫著『かやかやうま　上総のたなばたまつり』（一九七八年　童心社）は、山武地方の七夕馬の祭りが主題となっている。児童向けに出版された絵本であるが、祭りの内容が丁寧に描写されている。
(17) 『農閑の副業』下　葛飾区立郷土と天文の博物館　一九九二年　七八―七九頁
(18) 大島暁雄『上総掘りの民俗　民俗技術論の課題』一九八六年　未来社　三一五―三一六頁
最新の大島論文「民俗技術創設の背景と課題」（『國學院雑誌』第一〇七巻第十二号　二〇〇六年十二月　十五―二十六頁）では、平成十六年に文化財保護法が一部改正され、民俗文化財のなかに従来の「風俗慣習」と「民俗芸能」に加え、「民俗技術」加わった背景を述べている。そこからは「民俗技術」が突発的に新たな分野として浮かび上がったのではなく、昭和五十年に風俗慣習から民俗芸能が独立したことによって、民俗技術もまた無形文化財の概念の中では独立すべきものとなったことが述べられている。
(19) 「仙台地方の年中行事・調査報告一　泉区福岡蒜但木の正月と盆」『足元からみる民俗四』仙台市歴史民俗資料館　一九九五年　七十六頁
(20) 「下飯田の祭と年中行事」『足元からみる民俗五』仙台市歴史民俗資料館　一九九六年　二十二頁
(21) 「農家の年中行事　太白区山田の大里家」『足元からみる民俗十』仙台市歴史民俗資料館　二〇〇二年　八頁
(22) 大島暁雄は「民俗技術創設の背景と課題」（前掲）の中で民俗保護の活動を支えるためには事務局の体制を整備することが必要であるとし、この役割を当該地域の博物館、資料館に期待すると述べている。

[**Summary**]

Transmission of the Techniques for Making *Tanabata-uma*

HATTORI Hiromi

In this paper the author discusses the making of *tanabata-uma*, one of the many customs of *tanabata,* an annual Japanese festival of stars, from many aspects associated with it, including the techniques for making it, in different areas of Japan.

Various elements have been combined intricately and transmitted throughout Japan as events related with *tanabata:* that of *kikkoden* introduced from China, of wheat harvest festival, and of *nanoka-bon,* one of the many *bon* events. At the same time, because of the custom of bathing at *tanabata* in some areas, it also has an element of a purification ceremony.

Tanabata-uma is a horse made of wild rice plant or wheat straw early in the morning of the 6 th or 7 th of July in the lunar calendar. It is placed together with bamboo decorations and is floated down a river or put on top of a roof at the end of the festival. People believed that *tanabata-sama,* interpreted by some as the god of the fields, or their ancestors visited them riding this horse.

The transmission of *tanabata-uma* is significantly seen in East Japan. In the present investigation, *tanabata-uma* of Mobara-shi in Chiba prefecture, Iwaki-shi in Fukushima prefecture and Sendai-shi in Miyagi prefecture were studied from various aspects, including the way it is made. The characteristic of *tanabata-uma* at Mobara-shi is that although people originally made *tanabata-uma* at their homes, later it began to be sold at *rokusai-ichi* markets which were held regularly in this area. With the sale of *tanabata-uma*, villages and homes that specifically made it began to appear and it became more ornate. This means that the making of *tanabata-uma* became professionalized. In this sense, the making of *tanabata-uma* at Mobara-shi is an example that shows the process of the transmission of folk techniques.

On the other hand, *tanabata-uma* of Iwaki-shi and Sendai-shi were made of wheat straw or rice straw. They were not sold at markets and, at least until the 1950 s, were made at homes. This may explain the reason that the design of these *tanabata-uma* is simpler compared with that of Mobara-shi. It is clear that there was no attempt to create sophisticated design and it does not show professionalization of the techniques.

Research and Reports on Intangible Cultural Heritage
Number 1
2007

Publisher:
National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo
13-43 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo, 110-8713, Japan

無形文化遺産研究報告　第1号
平成19年3月25日印刷
平成19年3月30日発行

編　　集　独立行政法人　文化財研究所
東京文化財研究所
『無形文化遺産研究報告』編集委員会

編集委員　無形文化遺産部　部長心得　宮田　繁幸
音声・映像記録研究室長　高桑　いづみ
無形文化財研究室長　鎌倉　惠子
成城大学講師　星野　紘
法政大学能楽研究所　山中　玲子

発　　行　独立行政法人　文化財研究所
東京文化財研究所

〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43
電話　03（3823）2241

© 独立行政法人文化財研究所
東京文化財研究所 2007

National Research Institute for
Cultural Properties, Tokyo